

甲子園で輝いた背番号「1」 日本一の球児が故郷に凱旋

故郷を離れて夢と白球を追った、大阪桐蔭高校・福島孝輔選手

3917校の意地とプライドがぶつかり合った、高校球児あこがれの夏の甲子園。全国の強豪たちとの激戦を勝ち抜き、見事栄冠に輝いた大阪桐蔭高校の背番号「1」、福智の球児・福島孝輔選手の軌跡をたどる。



↑自宅の一角には福島選手が活躍した試合の記念品や写真がズラリと並び。輝かしい栄光の影には、家族の温かい支えが常にあった。



福島 孝輔(ふくしま こうすけ) 選手▶大阪桐蔭高校3年。サイドスロー投手。右投げ左打ち。平成8年5月23日生まれ、神崎出身。

「最後のアウトを奪ってから試合終了の整列まで、実は何も覚えていないんです」と、優勝の瞬間を振り返る大阪桐蔭高校の福島孝輔選手(神崎)。8月26日、第96回全国高校野球選手権決勝で三重高校を

4対3で下し、3917校の頂点に立った背番号「1」。激闘の疲れが残る28日に凱旋帰郷し、嶋野町長に優勝報告を行った。この日、本庁舎には大勢の住民が詰め掛けた。福島選手はロビーに入りきれないほどの住民の前に、「みなさんのご声援のおかげで、素晴らしい結果で終わることができました。本当に感謝しています」とあいさつ。大きな拍手とともにかけられた「おめでとう」「かっこよかった」という祝福に、福智の球児は暑い夏で日焼けした顔から白い歯を覗かせた。



最弱から這い上がったナイン
2年ぶり5度目の優勝を果たした大阪桐蔭高校は、西谷浩監督のもと、創部26

年で西岡剛選手(阪神)や中田翔選手(日本ハム)など数々のプロ選手を輩出してきた。強豪・大阪桐蔭として、甲子園を夢見る球児が全国から集まり、全員寮で生活しながら、正月以外の360日、技術を高め合っている。勝つことが当たり前。そんな環境に身を置く福島選手だが、甲子園までの道のりは決して順風満帆ではなかった。
伝統の背番号「1」を身に付けた昨春秋、大阪府大会で1対13の5回コールド負けを喫す。甲子園への5季連続出場を逃し、チームは「桐蔭史上、最弱」と評された。「くやしいというよりも、絶望でした。偉大な先輩たちが築きあげたものを自分たちがつぶしてしまった」と当時を振り返る。地方出身者が多いこの代は、

「このままじゃ、何のために故郷を離れたのかわからない。どの学校よりも練習をしよう」と奮起。選抜のない冬の練習は熾烈を極め、西谷監督も「これまで一番練習した」と語るほど。しかし、エースとして人一倍責任を感じていた福島選手は、いくら猛練習でヘトヘトでも、自主練習を欠かさなかった。4か月で体重を10kg増量、筋トレやシャドウピッチングを繰り返し、最高球速を10kmも更新。悔しさを、応援してくれる故郷への想いを胸に投手力を磨き抜いた。そして、チームとしても組織力が高まった大阪桐蔭は、昨秋のリベンジを果たし、府予選を突破。念願の甲子園出場を決める。



アキラブに入部後は野球漬けの毎日。「正直やめたいと思っただ時もあった」が、練習がない日、友人と遊ぶときは「やっぱり野球をしていた」と目を細める。当時から親友でクラブでも「常に汗を流した浦田翼さん(金田)とは、福島選手が唯一帰省する正月には必ず会うほど親交が深い。3年生最後の年

は、アルプスで浦田さんの姿を見つけると、小さなガッツポーズで友情の形を現した。「地元福智にいる家族や友人、応援してくれるみなさんの存在が大きかった」という福島選手は、「みんなの応援に込めるために頑張ろう」という気持ちで心の支えになりました。一生の宝です」とほほを緩める。福島選手の次のステージは大学野球。「高校で日本一になった選手として恥ずかしくない選手になりたい。プロはその先。まずは大学日本一を目指したい」と一点の迷いもない表情で語った。「一番暑い夏を経て、一回り大きくなった福智の球児は、故郷という宝物を胸に、次の目標をしっかりと見据え、新たなマウンドへと歩みを進めている。

勝利を呼び込む機転の一球
強豪校ひしめく大舞台での連戦では、幾度となくピンチを迎えたが、そのたびに

「勝ちたい」。その一心であがったマウンドで、エースとして堂々のピッチングを披露する。2回に先制されながらも、仲間の援護を信じて投げ続けた。1点ビハインドで迎えた7回、「一死三塁の大ピンチ。次取られたら負ける」と神経を研ぎ澄まし、投球に入った瞬間、走者と打者の様子で「スクイズだ」と見抜く。リリーフスに入っていたため、女房役の捕手・横井選手を信じ、スライダの握りのまま、とつさにアウトコースへ大きく外す。その一球は打者のバントをかわし、三塁走者を扶殺。ビッグプレーで勢いに乗ったチームはその裏に逆転。118球目で最後の打者を打ち取り、アウトの瞬間を見届けた福島選手は、勢いよく両手を天に突き上げた。

挑戦の支えは故郷という宝

「気付いた頃には野球が好きでした」と語る福島選手は、4歳のときから父・孝泰さんが所属する野球チームで白球を追っていた。いつしか野球が日常になり、自宅の壁を相手に日が暮れるまで壁当てをするほどその魅力にはまっていた。金田ジュニ



↑「涙で声ができませんでした」という試合終了後の校歌斉唱。一列に並んだナイン全員が感涙にむせぶ姿は、死力を尽くした激闘を物語る。

- 1 町長からの「町民に大きな勇気を与える活躍でした」という祝福に笑顔を見せる福島選手。
- 2 3 集まった大勢の町民から握手やサインを求められ、一人ひとりお礼を述べながら丁寧に対応。日本一の球児が子どもたちの瞳に輝きを与えた。
- 4 5 6 7
- 4 5 8月29日、金田ジュニアクラブ島田監督の発案で祝勝会を開催。集まった約100人と甲子園での経験を共有。
- 6 大阪桐蔭の慣例、優勝時のみ持ち帰る貴重な甲子園の砂をプレゼント。
- 7 親友の原田翼くん(写真中央)と久々の再会。